
幼稚園になれにくい子ども

—— 相談事例から ——

はじめに

自分のうちで、勝手な振舞いが許されていた幼い子どもが、幼稚園という集団生活に入るので、子どもにとっても、とまどうことがいろいろあるわけです。一方幼稚園の先生側にとっても、子どもに自分の思う通りの行動を傍若無人にやられては、困り果ててしまわれて、叱ったり、おだてたり、手を焼かれることもあるでしょう。入園当初の幼稚園の様子をみていますと、「泣いて附添いの人から離れない子ども」「友だちを意味なく突き倒す子ども」「部屋のすみっこに、つつ立ったままの子ども」「先生にまつわりつく子ども」「めそめそ泣いてばかりいる子ども」など、それはいろいろな子どもをみかけます。(入園テストをして、不適応な子どもをふるっている幼稚園ではその数は少ないようです)それが半年もすぎると、目立つ子どもはずっと少なくなっているもので

権 平 俊 子

す。入園当時の幼稚園での扱いや、家庭での扱い方などの適、不適によって、子どものそうした社会不適応をどのようにしていくかを決定しているように思われます。私は、十年来、こうした幼稚園不適応児の相談を数多くあつかって参りました。それらの事例をみてみますと、幼稚園の入園当初にどの子にもちょっとした起る問題行動に対して、母親が大騒ぎをしたり、おろおろしたりしたためや、幼稚園において、先生が非常に熱心で、早くグループ活動をして欲しいと考えて、子どもを叱ったり、なだめたりし過ぎたための者や、反対に子どものこうした行動に気づかず、ちょっとした原因の除去をしなかったため、深みに落ち入ってしまった例もあります。また、父兄側と、幼稚園の先生との人間関係がよくなくなってしまうて子どもが犠牲になっている場合が意外に多いものなのでびっくりしております。幼稚園の先生方からみれば、いろいろなタイプの母

親があると思います。先生も神様ではないのですから、感情のゆきちがいが起こることがあっても、ふしぎはないのですが、私が母親のカウンセリングをしてきた経験を通じて、母親の立場から、幼稚園になじめない子どもをもった場合の心境を述べて、なにかの参考にして頂ければと思います。

今まで家の中で、大切に育てた我が子を、幼稚園という新しい社会生活にはじめて送りこんだとき、大きな期待と不安をもって子どもを見つめております。その子どもが幼稚園で皆と違った行動をとったり、行くことを好まなかったりすると、母親自身の期待が裏ぎられた気持ちになり、不安になり、あせってきます。その結果、子どもを叱ったり、なだめたり、おだてたりすると同時に、幼稚園の先生がもっと上手に扱ってくれば、子どももなじめるのになあと考えてみたり、また自分の子どもに劣等感をもってしまつて、家の子どもなど手がかかって御迷惑だろうからと、さっさと幼稚園を休ませてしまつたりするようになります。入園時期の忙しきから、先生方もこうした訴えや不安をもつ母親とよく話し合う機会を持たず時をすごすと、母親の不安と不満はつもの一方です。そのため、「先生がこの子を嫌っているのではないか」「早く止めてくれればよい」と思っているに違いない」と思い悩むようになり、よい結果にはならないことが多いのです。母親が心配しているようなときには、ゆつくり話し合う機会をつくつて、母親の考えをよく聞くと同時に、教

師として、どのような方針で子どもを扱っていかうと思つていか、家庭ではどのように扱つたらよいかなど、充分に説明することが、このような子どもをもつ母親にとって一番大切なことだと思います。面接した結果、非常にむずかしい事例だと思われたり、家庭に複雑な事情など、こみいった環境の影響を受けているような事例に対しては、専門の相談所にゆくことをすすめた方がよいと思ひます。(幼稚園の先生方に、むずかしい事例を解決できる能力がないというのではない。難事例においては、教師对幼儿、幼児対保護者という人間関係では解決できない場合があります。もちろん専門家だけで解決できるものでもなく、幼稚園―家庭―専門家の協力によつて、このような子どもの問題解決の成功をみる事ができるものだと感じております。)

(1) 幼稚園になれにくい子どもにつき、とくに注意する点

多くの幼児は、急に変わった環境に入るのでから、大なり小なりのなれにくさを示すものです。多くの場合、放つておいても徐々に馴れてゆくものですが、次の点に注意する必要があると思ひます。

(a) 知能の発育はおくれでないでしょうか。

知能の発育がおくれていると、同年令の子どもと同じ行動をとることができずに別行動をとったり、ぼんやりしていることがあります。こんな場合には、むりやりにグループに入れるようと努めるより、知能年令が同じ子どもをグループに入れるようにすることが一

番大切だと思えます。子どもの知能程度を知ることがむずかしいものですが、とくにグループになじめない子どもの場合には、知能検査に応じないのか、本当にできないのか判断するのが困難です。行動観察や家庭での様子などを合わせて診断することが大切です。

(b) 運動機能、感覚器官に異常があったり、身体的な疾患はないでしょうか。

運動機能に異常があり、鉄が上手につかえなかったり、片足とび、スキップなどが上手にできない（練習をさせてできるようになる程度ではない）場合、視力、聴力などに異常がある場合などにも他の子どもと同じような行動がとれない。身体的な疾患、とくに慢性的の病気や、病気発病の初期でおとながまだ気づいていないようなときに、子どもは活発に行動せず、ぐったりしたり、いらいらしたり、泣きやすくなることがありますので、注意してみてください。

(c) 小児精神病ではないでしょうか。

小児分裂病の初期や、軽い者はグループに入れなかったり、自分勝手な行動をとったり、話しかけても反応しなかったり、反覆語や独言をいったりします。そういう子どもは小児精神科医の診察を受けることをすすめる必要があります。てんかんの小発作のある子どもは時々、反応しないでぼんやりしていたり、手に持っている物を落としたりします。このような場合にも専門医の診断を受けるようにすることが大切です。

(d) 社会生活能力が非常に高くおいていないでしょうか。

知能の発育が普通以上であっても、靴のぬぎ、はきが上手にできなかったり、お手洗いにひとりできけなかったり、日常生活に必要な動作が他の子どもに比較して非常に高くなっている場合には、他の子どもに押された感じになって、グループに入れなくなってしまうことがあります。一人っ子や末っ子に多いようですが、家庭とも連絡をとって、身の廻りのことが自分でできるように練習させていくことが大切です。しかしこのような子どもの場合にはあせることは禁物です。

(2) 幼稚園になれにくい子どもを幼稚園で上手に受けた例

二年保育で入園したA子は、入園テストの時は割合によく応じていましたが、入園式の当日、大勢子どもが集まっている雰囲気ばかりだったのか、一人で走り廻って、入園式が始まって、自分の席につかずに、前にでてピアノをたたいたりしました。それがとめられると、床にすわりこんで、上靴をぬいで投げるなどして、大騒ぎをしてしまいました。母親は家では特別問題行動を示したことがなかった我が子のこの姿を見て、びっくりするやら、はずかしいやら、悲しいやら、おろおろするだけでした。その後、保育がはじまってからも、一人で勝手な行動をとって皆が室内に集まっているようなときでも、外にでてブランコにのっていたり、それでいて気が向くと、年令並以上の絵をかいたり、折り紙をするのでした。先生もた

いへん心に掛けていらしたのですが、母親は幼稚園に迎えに行く度に、皆と変わった行動をとっている自分の子どもをはずかしく思い、また幼稚園でも御迷惑だろうと考えて、幼稚園をやめさせようと思心して、先生に相談されました。先生は「今やめさせてしまうことは、A子の一生にとってよくないことだと思う。こういう子どもこそ幼稚園の教育が必要なことから、自分たちも努力してゆくが、望みを捨てないで、一度愛育研究所に相談にいらしてみたらどうか」と当所への来所をすすめられ、母親がA子を連れて幼稚園が始まって一か月後に訪れてきました。母親と面接の結果、A子は、おせい結婚の上に、結婚五年後にやっどできた一人っ子なので、それはそれほ大切に育て、子どもの好きなようにさせておき、友だちも近くに適當なのがいなので遊ばせないで遊ばせてきました。入園式の行動は全く予想外で、家においては困ったり、手こずったこともなかったといえます。出産は正常で、生下時体重も標準あり、人工栄養で育てましたがミルクの飲みが悪くて手をやいたが、発育も正常で、とりたてた病気もかかっていません。生育史からみて、特別問題となる点はないと思いましたが、ひどく集団行動をしない点から、一応脳波の測定を専門医に依頼しました。

その結果は異常がなく、知能検査には、勝手な行動をとり、なかなか検査に応じないので、知能指数を出すことはできませんでしたが、知能の発育はおくれないと思われました。幼稚園の先生と

相談の結果、A子には遊戯療法を、それに並行して母親にはカウンセリングを行ないました。ここではこの経過ははぶき幼稚園での扱いを中心に見てゆきたいと思えます。私からみて理想的だったと思えます。先生は、A子は勝手な行動をしていても危いことは絶対にしてないようだから一人で外にブランコにのっているときに、無理やりに中に入れようとすると、抵抗して却ってよくないと思う。放っておくといつの間にか入ってきて、友だちと一緒に何かしているから。

しかし、一番困ることは、参観にきている他の母親が、「あの子が一人だけ外にでていますけれどいいんですか」といわれたとき、放ったらかしの保育をしているのではないかと思われはしないかと不安になったそうです。そんな非難も乗り越えて、ただ放っておくだけでなく、当番などをさせたり、ひまをみてはA子にやさしく声をかけてやるようにしました。だんだんに友だちと遊べるようになり、家庭でも、できるだけ幼稚園の友だちをよんで遊ばせるようにしていったところ、十月頃には幼稚園で目立つ行動をとらなくなり、運動会には皆と同じようにすることができました。幼稚園の先生方のやさしい受け入れによって、その年の十二月には他の園児と全く変わらない子どもになりました。

(3) 幼稚園になれにくい子どもを幼稚園の受け入れに失敗した例
A子と同じような事例である子の例をみましょう。二年保育で入園したB子は、むずかしい入園テストに合格(おとな)との関係は

大へんよい、とくに「一対一の場合には問題ない」して、一流幼稚園に入園しました。入園式の当日には、自分の席から離れて歩きまわって、先生に注意されると母親のそばにゆき、まつわりついていました。翌日から保育では、母親がおいで帰りますと、先生にまつわりついて離れず、先生が無理に離すと、床にねころがったり、友だちがちよっとさわったからといって大声で泣き叫び、先生も手をやかれ、母親に「優秀な子どもを集めている幼稚園だから、とてもB子ちゃんはお引き受けできない」と十日目に言われた母親と面接の結果、B子は母親が再婚してできた子どもで、両親は年をとり、異母兄は結婚して別居しているため、B子は一人っ子と同じようにして育ちました。その上早産児で生下時体重も二千百㌘であったのと、母親自身が高年の初産のため産後の状態が悪く、一年間看護婦をやとって育てたほどでした。B子はひどい病氣もせず、発育は標準以上でしたが、母親は心配の余り、手をかけて、B子のいいなりになり、友だちと遊ばせて伝染病にでもなったら困るので家でおとなが相手をしてきました。母親は幼稚園に入園させるまで、なんの心配もなく、あんな行動をとるとは思いもよらなかったのとべておりません。子は知能検査によく応じ、知能指数は百二十八でした。母親と相談の結果、B子に集団で遊戯療法を行なうことにしました。

幼稚園の先生が当所にいらして、「B子は私の幼稚園にむく子どもではない。保育中集団に入らないで、うろろろしているの、園

長に自分が叱られてしまう」とのこと。筆者が「こういう子どもほど幼稚園の教育が必要だし、だんだんなれてくると思うから、もう少し様子をみてほしい」とお願いしたのですが、幼稚園としては引き受けられないという考えは変らず、B子は叱られてばかりいるので幼稚園を嫌がるようになってしまいました。それで母親も退園させることを決心してしまいました。B子のような場合、幼稚園に入れる必要を感じて、母親と相談して、家の近くにある別の幼稚園にゆき、事情を話したところ「すぐに幼稚園になじめない子どももいるものだから、面倒をみてみよう」と快く引き受けて下さいました。

幼稚園では、B子を先生の隣の席におき、声をかけてやったりする一方、B子が泣き騒いだときには、無関心をよそおって放っておきました。家にも友だちを呼び、遊ばせるように努めた結果、十二月クリスマスの頃には皆と同じような行動をとるようになりました。

あとがき

幼稚園になじみにくい子どもについて、お話してきましたが、このような子どもの場合には私どもの仕事において治療していくだけでは完全に成功できるものではなく、現場の先生方の協力によってなされるものと信じています。子どもたちが人生の第一歩である幼稚園生活をうまく過ごせるようにすることによって、大へんこれからの生活にプラスになると思っております。